書評

蔵中さやか著『題詠に関する本文の研究　大江千里集　和歌一字抄』

井上宗雄

この書評を書くに至った経緯は末尾に述べることとして、早速本題に入ろう。

まず章だてを記しておこう。

序　　大槻　修

第一章　『大江千里集』をめぐって

（五節および付節より成る）

第二章　原撰本『和歌一字抄』をめぐって

（三節および二付節より成る）

第三章　和歌文学に関する論考

（『定家小本』に関わる論一節、十如是歌に関わる論一節）

資料編

校本『大江千里集』、校本　原撰本『和歌一字抄』、原撰本・増補本『和歌一字抄』

上巻　歌題索引

なお「初出一覧」「あとがき」を付す。

まずこの書の二本柱の一である『大江千里集』についてであるが、第一、二節が伝本とその系統に関する論である。従来異本系が重視・研究されて来たことに対して、数多い流布本を、三十本近く検討し、伝寂蓮筆本を中核として諸本の系譜を作成し、流布本系統の原本は遅くとも寂蓮・定家生存期（鎌倉初期）に成立していた、と結論づけている。そして異本（書陵部本）との詳しい比較検討に及び、説得力ある論証を行っている。次に『天木抄』に千里の歌四十四首が入集していることから、その時代の『千里集』の様態を考察し、更に、「一句題出典詩の発見」「歌風の分析」「千里の漢文作品」など、千里や集に関わる内容追究に及んでいる。以上、伝本や資料の博捜、それらに基づく目配りのきいた考証、本文の緻密な読みなど、手堅い考察である。

次に、もう一つの大きな柱である原撰本『和歌一字抄』の研究について述べよう。

申すまでもないことだが、藤原清輔撰の『和歌一字抄』には原撰本と増補本とがある。上下二巻に分れる内、下巻にはまだ原撰本が発見されず、以下、原撰本（上巻）にしぼって考察が行われている。

原撰本の諸本は次のように分類されている。

I　1三康図書館本、京都女子大学谷山文庫本

2書陵部（一五五・一〇八）本

II　内閣文庫本

（右の外に、おそらくIに属する大阪青山短期大学本がある。全文は未公開）

著者（蔵中さん）の検討は詳細をきわめるので、要を摘んで述べるが、第一節で、『和歌一字抄』は、その標目立て（東・北……田家）に、作文のための手引書「一字抄」（『文鳳抄』付載）

が影を落していないか、と注意すべき指摘を行っている。次に、詠者名の呼称とその表記の問題、標目とその中の歌題の配列について、和歌本文に脱落箇所ある点についての考察など、問題点をよく抉剔して解明を試みている。例えば、標目「深」はⅠの十七題に対してⅡは七題しかない。著者は『明題部類抄』にある「一字抄題」に着目、それを活用してⅡの脱落部分を想定し、極めて妥当な結論を導く。

第二節。原撰本上巻のⅠからⅡへの改訂について、多くの例を挙げ、改訂は大幅な増補を目論んだものではなく、切出しに重点を置き、そこに差替え歌を補って各標目内部の充実を図った、とする。私もⅠとⅡとの違いは気がついていたが、この指摘は妥当ですぐれたものと思う。

その改訂はいつごろ、どのように行われたか。細かい論証を行っている。

その論旨を要約することは難しいので、委細は記さないが、配流された崇徳院、物故した行宗・実行の歌が渡り、忠通の歌の増加したこと、同じ題詠に関する『題林』の撰了（三条天皇在世中）によってその編纂意図などが、『一字抄』改訂に作用したのではないか。そして仁安年中に成った『和歌現在書目録』の増補部分に『一字抄』の掲げられていることから、Ⅱへの改訂は保元の乱後十年を経た頃と思われる、とする。興味深く注目に価する論証で、Ⅰ→Ⅱへの改訂問題は今後これを基にして考える要があろう。

第三節は崇徳天皇内裏歌壇資料について、松野陽一集成の補遺を『一字抄』によって行ったものである。『一字抄』が有効に資料として用いられた好例であろう。著者は『一字抄』の持つ資料的価値から、この書が単なる作歌手引書に留まらない側面を有していたか、とするが、それはその通りで、作歌手引書なるが故にやはりよい歌を広く選んでおり、秀歌撰乃至は撰集的な性格が備わっていることは確かである。

付節一として崇徳院句題百首を考察している。これは『風情集』『貧道集』によってあらましが分るのだが、それらの検討・整備を経て、堀河・永久・為忠初度百首の題と比較し、句題百首の特徴を指摘し、かつ句題百首・句題ということに詳しい考察を加え、また崇徳院句題百首に加わった歌人を推定しており、外にも幾多の新見があるが、この百首の習作的傾向を指摘すると共に「稚拙な和歌に比して歌題の先進性が注目され」「中世の百首に繋がる催しとして」位置づけられる、とする。この辺は、著者の、中世の句題和歌への見通しと共に、中世和歌とは何かという今後の課題への取組みが期待される所。

付節二の『風情集』は、草稿・未定稿といわれている家集の分析。第三章に入って、『定家小本』について二節にわたる詳しい考察、とりわけ後者は力作と思われるが、紙幅の増大をおそれて詳しくは述べない。第三節は十如是歌の論である。これは中世和歌ではしばしば詠まれるものだが、著者が初めて「十如是歌考――『しのびね物語』書陵部本最末歌群を端緒に――」（『甲南国文』38、平成三年三月）を発表した時には、まだこれを扱った論文は殆どなかった。この論文は、十如是歌が中世後期の作品である

『しのびね物語』書陵部本の末尾になぜ付載されたか、という課題に取組んだもので、十如是歌を博捜して物語付載のそれが宋雅千首中のものであることを指摘、更に物語の展開と十如是という仏教理念との共通性によって付されたのであろう、と推測する。物語との関わりと十如是歌の解明と、両面において高い価値を持つ論文である。

資料編における『大江千里集』校本ほか、『一字抄』原撰本上巻の校本（底本は谷山茂本で、内閣・書陵部・三康本との校異を掲出）には詳しい脚注があり、更に原撰本・増補本（上巻）の歌題索引を付し、きわめて有益である。

本書を通観していえることは、従来の研究文献を広く収集し、伝本を博捜し、語句の異同などを厳密に抑えた上で立論する。実証的態度に貫かれ、安心して依拠できる記述である。同時に『一字抄』の考察では平安末期和歌史の趨勢にもよく目配りが為されていて、その上に立った適切な推定が随所に見られ、なお著者の漢詩文の力もよく生かされて、すぐれた研究となっている。

『一字抄』の下巻は伝本の少ないこと、増補本の複雑なあり方などが壁となって研究が進んでいないが、著者にぜひとも取組んでいただき、『一字抄』全体のよりよき姿を示して欲しいと思う。また著者は「あとがき」で、『千里集』と『一字抄』とが成立年代も性格も異っているが、題詠による集という共通点でまとめ、『題詠に関する本文の研究』という題にしたという。題詠の研究は和歌史に止まらぬ面があり、将来性のある豊かな課題であろう。ぜひとも果敢に立向っていただきたい。

私的回想になるが、往年内閣文庫に通って多くの蔵書を閲覧している内に、原撰本『一字抄』に行きあたった。文庫でしばしばお目にかかった樋口芳麻呂さんから、よく見つけましたね、と褒められたのが昨日のような気がするが、もうそれから四十年もたってしまった。そのころ『一字抄』は勿論、清輔や六条家の研究も寥々たるものであった。やがて多くの方々の努力によってこの分野の研究は見違えるように進展し、遂にこの蔵中さんの大著が生れたのである。

中古文学会の折、大槻さんから書評を書くようにと依頼された。その時、この大著を私なりに充分な手ごたえをもって読了してはいたが、大江千里に関しては学ぶことばかりなので尻ごみした。ただ、『一字抄』についてこの緻密な書の感想を話し合っている内に、結局書かせていただくことになった。本当は今この分野で第一線に活躍している川上新一郎・中村康夫・日比野浩信・浅田徹さんといった方々がふさわしいとは思うが、ともかく『一字抄』研究を少しばかり先きに始めた者というだけの理由で無辞を連ねることになった。この労作の全貌を述べ尽せなかったことを深謝すると共に、蔵中さんがこの大著を軸にして、いよいよ研究を進展されるように、と庶幾う気持、切なるものがある。

（平成十二年一月二十五日　A5判五六六頁
定価二八、〇〇〇円　おうふう）

〔いのうえむねお　文博・立教大学名誉教授〕